

## 高校卒業後の歩み

東大医学部同窓会新聞「鉄門だより」への寄稿文

### 所属・肩書

医療法人 HMS はら耳鼻咽喉科 理事長

日本交通医学会評議員

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会東京地方部会名誉評議員

原 誠

卒業年 1981年

江戸川区立松江4中の数学の先生に憧れ両国高校卒業後数学教師になろうと東大理科2類に入りましたが、数学科には勉強せず高度数学をすぐ理解できる方、つまりもともと天才肌の方が多くいることを目の当たりにしました。どれだけ私が頑張っても天才のひらめきには全く及ばず、このままでいいのかと悩む日々の中、伯父の手術のお見舞いでお会いした消化器外科の先生と何気に将来の話になり、医学は天賦の才能より勉学・経験がモノを言う世界だと聞かされました。どちらかと言えば努力家の私は医学のほうに向いていると考え、理科3類を再受験しました。父母には経済的に迷惑を掛けましたが、医学のあり方が自分に合っていると感じ嬉しかったことを覚えています。

無事卒業した私に再び選択の時が来ました。今と違って当時は学生のうちに専門とする診療科を選ばなくてはならず、科目数が多すぎ決められずにいたところ、たまたま耳鼻咽喉科医局長で両国高校出身の先輩が声をかけてくれ、ご縁を感じ東大医学部附属病院耳鼻咽喉科に入局し、のめり込むように研鑽を積んでいくようになりました。東大と自治医大の研修医を経て医局長・保健センター講師として日々の診療や研究に勤しんでいたある日、アメリカのハーバード大学への留学の話がありました。最先端の医学を学びたい、耳の診療・研究を極めたいという一心で家族と共にアメリカへ渡り2年間、電子顕微鏡を使って耳の病理学の研究を行いました。そこで日本とアメリカとのレベルの差を痛感しました。標本数も多く、それぞれの病歴もすべて記録されている実際の人の耳を標本にして研究できることは当時の日本ではほとんど行われておらず、とても得難い経験となりました。病気の原因と発生過程を毎日研究しているうちに、だんだんその方の耳の状態が3次元の映像として見えてくるようになり、ここで得た知見は69歳になった今も役立ち、患者さんの話を聞くだけである程度どこを診察しなければならないかわかり、アメリカで学べたことは私の一生の財産となりました。

その後は JR 東京総合病院の耳鼻咽喉科に勤務し部長職まで勤めましたが、ちょうど高齢者雇用安定法が改正され定年が 65 歳になるタイミングの直前で誕生日が来てしまった私は 60 歳で定年することとなりました。そのようなことで定年後はすぐには開業準備が間に合わなかったため、千葉県柏市名戸ヶ谷病院耳鼻咽喉科部長として勤務し、各種機器設備を新しく揃えてもらい患者数もどんどん多くなっていきましたが、地元の親戚・知人達からも、いい加減に地元江戸川区葛西に戻って開業してほしいとの声が大きくなってきてしまい、名戸ヶ谷病院に行かない日だけ、駅からはだいぶ離れた自宅隣の古い貸家を使って、最低限の設備にてひっそりと始めてみました。平日の昼間は名戸ヶ谷病院、夜と土日に自院の診療と、8 畳の和室に小さなテーブルを置いて受付、反対側にソファを置いて待合、4 畳半のキッチンが診察と聴検防音室を置き、風呂場が薬剤室、最初はお茶飲んでおしゃべりする時間もある昭和のにおいがぶんぶんする古家の診療所からのスタートだったのですが、日を追うごとに患者数が増え、待合室に入りきれない患者さんが戸外にあふれ、開業一年で新患数 1600 人を超えるようになりました。遠くからも私のことを探してくてくれる方もおり、もう少し駅に近い広い物件に移動したいと考えていたところ縁があり、今の場所に開くことができました。名戸ヶ谷病院にもお世話になっていた関係でトータル 5 年間は掛け持ち診療をし、休みがほぼ無い毎日でしたが、数学科から医学科に変え 40 年間経ってみて、私にはこの道があっっていて、十分に自分の才能と努力が発揮できたことに、今、本当に幸せを感じております。今では延べ年間約 3 万人の方が来院し、子ども二人も後ろから付いてきていて東大耳鼻科と別大学耳鼻科に入局しておりますし、多少肥満ではありますが、今後も元気に生涯現役で患者さんのために、自分の持っているものすべてを使って診療を続けていきたいと思っております。